

古志青年部年間作品集 第六号

目次

〈俳句作品〉

■自選十二句

大陸の風

イーブン美奈子

6

大海

石塚直子

8

蟻の穴

伊藤 空

10

歲月

岡崎陽市

12

雪螢

金澤諒和

14

瓦ふる

関根千方

16

富士

高角みつこ

18

舌先	竹下米花	20
青嵐	丹野麻衣子	22
浴衣	辻 奈央子	24
父へ	内藤 廉	26
火男	西村麒麟	28
熊本城	前田茉莉子	30
猿になるまで	三玉一郎	32
坂の上	森 篤史	34
唐津焼	吉富 緑	36
エロス	渡辺竜樹	38

■ 半歌仙			
「熱田津」の巻	イーブン美奈子・岡崎陽市		40
「乳呑子」の巻	岡崎陽市・関根千方		42
「麦わら帽子」の巻	イーブン美奈子・岡崎陽市		44
■ 青年部入会案内			46
〈文章〉			47
■ 作品講評	土肥あき子		48
■ 青年部合宿句会報告	石塚直子		60
■ 青年部年間活動記録			63

俳
句
作
品

大陸の風

イーブン美奈子

わが国の花もて飾れ夏帽子
大陸の風浴びてゐる簞
憧れは宇宙のかなた蟹動く
蛇の舌残り火のごと揺れてゐる
傲慢な若さ愛せよ夏の月

炙られて穴子は花の白さかな
透 明 な 傘 透 明 な 秋 の 雨
こ の 野 分 恋 の 魔 物 か 助 つ 人 か
薄 氷 の 上 と は 知 ら ず 蜘 蛛 の 子 よ
鯛 焼 と そ し て あ な た の 掌 と
人 体 を ひ と つ 維 持 し て 日 向 ぼ こ
春 の 塵 は る かな 国 へ 吹 か れ たり

■一九七六年生まれ。神奈川県出身、タイ国バンコク在住。古志同人。ホームページ部部長。海外日系人協会の第四回みなとみらい文芸祭にて海外日系人協会理事長賞、第八回、第九回同文芸祭にて文芸祭賞受賞。

大海

石塚直子

蕎麦湯分け合うて別れを惜しみけり
一本の冬木のごとく座禅して
逃げてゆく鼠の顔も師走顔
影までも薄くなりけり風邪の人
ふらここや大いなる句の出づるまで

いつの世かわれも桜でありし頃
身分など忘れて殿も田植えせし
大海となりし青田を蟻泳ぐ
夕立やもてなしの茶も三杯目
茄子は父瓜は母乗る馬とせん
星の妻夜ごとまばゆくなりゆくも
徹夜して帰る蛸鳴く街に

■一九八七年生まれ。茨城県出身、
東京都在住。古志同人。古志青年
部部長。

蟻の穴

伊藤 空

蟻の穴突とめて湯を流しこみ

吾子の髪ガーゼで洗ふおそれつつ

水の星やや傾きて滴りぬ

昼寝覚庭の木の根は触れ合ふや

妻ですと美しき人アイスティー

波の音月は静かに遠離り

いろいろの芋彫りて押す手紙かな

石朽ちて定家蔓が支へをり

葉が落ちぬ葉とその影が重なりぬ

ゆりかごの手を休め聴く春の風

ぶらんこや素足が星に触れる迄

分け入りて戯れる蜂牡丹薬

■一九六八年生まれ。神奈川県横浜出身、小四から中一にかけてモスクワで過ごす。静岡県浜松市在住。

歳月

岡崎陽市

歳月の舞ひはじめたる桜かな

咲きふぶく吉野は花の大宇宙

東京駅ゆきかふ人はかげろふか

麦わら帽子珊瑚の島を愛しけり

がやがやとまぶしきことよ氷菓店

大宇宙かんじとりつつ夏書かな
こころへと落ちてくるなり桐一葉
赤子生まれあつといふ間に蜻蛉追ふ
阿吽の門くぐりぬけては雪消ゆる
鳥ばかり飛んでゆくなり雪の岬
大いなる海の小さきくぢらかな
ひと射しに天地をひらく初日の出

■一九七二年生まれ。愛媛県出身、在住。古志同人。二〇〇九年、古志新人賞受賞。

雪螢

金澤諒和

去年今年戦へ向かふ座標軸
教へ子の紆余曲折や賀状来る
泥舐めて子らの田植の終りけり
背泳ぎの手の戦争へたどり着く
黙禱を覚え園児の夏終る

原爆忌海に水母の産れ続く
百年の家に遺され門火焚く
乾坤を一太刀したる添水かな
あつさりと罪を赦して村芝居
駅裏といふ一面の枯野かな
牡蠣を剥く軍手右手に二枚重ね
雪螢メイヨノセンシトゲラレシ

■一九七一年神奈川県川崎市生まれ。二歳より大分県大分市在住。古志同人。第十七回隠岐後鳥羽院短歌大賞大賞（短歌）受賞。第三十四回子規顕彰全国短歌大会『短歌』編集部賞（短歌）受賞。

瓦ふる

関根千方

年の湯をぬいて渦巻く時空かな
大地震花ふるごとく瓦ふる
まみどりの桑の海ゆく蚕かな
海女けさの一の鮑を奉る
白南風や胸ぐらあけて大仏

鬼蓮は地獄の蓋のごとくあり

芋虫や露ころがしてすすみゆく

漱石の夢百年や秋の百合

山苞の柿は巖のつめたさよ

焚きにけり枯葉枯枝枯蟪蛄

獅子舞の暴れてゆきし雪のあと

はじまりは一つの泡や寒造

■一九七〇年生まれ。東京都出身、在住。古志同人。古志東京支部長兼ホームページ部部長。二〇一〇年、古志新人賞受賞。二〇一五年、第十回飴山實俳句賞受賞。二〇一七年、句集『白桃』（ふうらんす堂）上梓。

富士

高角みつこ

おにぎりと目刺でゆくか富士の山
北京語はホワラホワラと花見かな
若竹を庭に残して家普請
盥から日がなかりかり蟹の音
寄りかかるためにもありて冷蔵庫

つま楊枝 こんなものにも秋の影

吾がつむじ蹴つてはたはたはるかへと

鰯焼くうるはしき眼はそのままに

枯れ蓮や芯の芯まで枯れきつて

金粉の雲の蓋あけ節料理

成人の日のあと長し長きこと

今日くらい私の好きに牡蠣フライ

■一九七三年生まれ。兵庫県出身
大阪府在住。古志同人。古志校正
部部員。NPO法人 季語と歳時
記の会主催第一回「恋の俳句大
賞」受賞。

舌先

竹下米花

夜の果て酒果てて梨剥きはじむ
種のある葡萄のほうがおもしろい
一粒の牡蠣豊饒の海である
居座りし珈琲店の日短か
雪踏んで踏んで千年椿まで

これといふ名もなく千歳大椿

だれしもがをとめにもどる雛の間

初夏の波濤鯨の群のごと

晴読ときめて五月の公園へ

香水瓶相愛よりも甘きもの

幽霊図余所に掛ければ落つるとや

幽霊はてけれつつのぱで祓へ

■一九七四年生まれ。神奈川県出身、京都府丹後地方在住。古志同人。

青嵐

丹野麻衣子

酒召して若年様も猿のかほ
卒業の袴でとんで潦
芋植ゑてあとは知知夫の神まかせ
樟を吹く青き嵐や城こぼれ
舟虫ものせて防人歌の島

水兵の白き背中よ靴もまた
船によき風待つ島の蟬の穴
をしみなく新藁に火や鯉焼く
陣太鼓ひびけば燕帰るらん
小さき鉦大きく叩け鉦叩
一吹の風がたちまち凧に
火ひとつ焚く梟の森の奥

■一九七四年生まれ。石川県出身。
神奈川県に育つ。東京都在住。古
志自選同人。古志同人会副会長。
二〇〇七年第三回飴山實俳句賞受
賞。

浴衣

いさぎよく黄粉散らして鶯餅

ふきのすぢくづとなりても光りけり

今日だけは男あがめて浴衣ぬふ

ひそかにもふつくらとして青鬼灯

なあ毛虫われを這うてもつまらぬぞ

辻
奈央子

早よ帰れなすちやうどよく漬かるころ

青田風分けて北陸新幹線

芍薬のやうにゆたかに生き抜かん

ありがたし今日もまた月のぼりけり

残り柿防空壕の入り口に

露の中露をはじきて花ひらく

秋涼や齒ならびのよき鰈なり

■一九七七年生まれ。神奈川県横浜出身、在住。古志同人。古志編集長。

父へ

内藤 廉

蠮螋や発表会の初指揮者

白河の関を越えゆけ閑古鳥

秋茄子は山の神にもさらはるる

秋茄子に魑魅魍魎も唾付ける

あつあつのはらわたうまし焼き秋刀魚

尻もちをつきて掲げる大根かな

かもしかの脚もひきつる天下の陰

靴濡れて服も濡れても雪よ舞へ

おはやうも吹つ飛んでゆくからつ風

流星を数へて眠る葦枕

着ぶくれる父の姿に安堵かな

三千院雷聞かば帰るべし

■一九八一年生まれ。宮城県出身、
静岡県在住。

火男

西村麒麟

火男をやり終へて飲む秋の酒
草相撲代りに行つて負けにけり
冬の雲会社に行かず遠出せず
寄り添うて夫婦の如き海鼠かな
春風やまだそこにある烏瓜

散りやすく散りゆく彼岸桜かな
涅槃図の古りて仏の見当たらず
どこまでも真つ直ぐ奈良や夏燕
ヨット部のヨット何度も倒れをり
生き延びてくはがた虫の雌ばかり
夏の鹿我を笑つてゐる如く
岡山へ行ききたし桃を五つ食べ

■一九八三年生まれ。大阪府出身、
広島県に育つ。神奈川県在住。第
一回石田波郷俳句新人賞受賞。第
四回芝不器男俳句新人賞にて大石
悦子奨励賞受賞。第五回田中裕明
賞受賞。第七回北斗賞受賞。

熊本城

前田茉莉子

三寒や少し湿りし丸ボーロ

魔女役の頬赤らめてバレンティン

崩落のま白き壁や犬ふぐり

地が震へ鳥が震へ梅雨に入る

黒南風や櫓の中を突き抜けて

崩落を逃れし柱梅雨に入る

少し病む人コバルトのかき氷

肥後の子の声透きとほる浜日傘

立ち入れぬ熊本城や若葉風

失恋のフォークの先の塩トマト

にっかりと笑ふ幽霊ナイフ研ぐ

浮草や八方美人の君も好き

■一九八四年生まれ。宮崎県出身。熊本県在住。小学三年生の時より俳句を始める。宮崎日日新聞社学園俳壇賞、小林一茶俳句大会、十七文字の青春入選。

猿になるまで

三玉一郎

金剛杖つけばたちまち雪間かな
春眠の振りして睦ぶふたりかな
対岸に回りて浮巢なほ遠く
たましひのひとかたまりや蚊帳の中
一筋の雷のぼりゆく瀑布かな

戦はぬためのたたかひ原爆忌

台風の成れの果て来て騒がしき

縁また歌仙のごとし玩亭忌

よく枯れて一本の木となりにけり

だぼだぼの上着の中のクリスマス

飽いてより俳諧の道去年今年

心身の猿になるまで初湯かな

■一九六五年生まれ。宮城県出身、
神奈川県在住。古志同人。

坂の上

森
篤史

口づけで君目を覚ます春野かな

風船売 have a nice day と声かけて

どの坂の上にも雲や夏来る

迷ひつつ立ち止まりつつ蟻歩く

ああああと相槌打つてゐる大暑

前後分からぬほどに日焼して
道をしへ道を逸れねば着けぬ場所
部活てふ大いなる夏終りけり
一礼し球場去りて秋風に
生きるため大き屁をして放屁虫
上るより力籠りて鮎落ちる
母が肉父がケーキを切る聖夜

■一九九〇年生まれ。埼玉県出身、在住。第三回恋の俳句大賞受賞。

唐津焼

吉富
緑

花
び
ら
も
藻
屑
と
な
ら
ん
能
古
島

大
根
の
花
咲
く
と
こ
ろ
暮
ら
し
あ
り

月
光
は
か
く
も
白
き
や
月
下
美
人

ペ
ー
ロ
ン
や
銅
鑼
な
き
人
は
手
を
叩
き

団
栗
の
回
る
音
か
な
洗
濯
機

新涼の山立ち上る唐津かな

白湯汲みて茶碗よろこぶ今朝の秋

干柿に都会の空は四角かな

烏瓜背より夕日の迫りけり

ほととぎすこれより先は九十九折り

唐津焼たとへば白き寒椿

熊穴に入りて寂しき金太郎

■一九六八年生まれ。長崎県出身、福岡県在住。

エロス

渡辺竜樹

動きゐる春の曲線磯づたひ

吉野山法螺のひびきも花曇

ひたすらに白き眠りを花の下

籠り人に夢のしだるる桜かな

花に寝てけさのあくびも花の塵

貝の身の抱く真珠も明け易し
蛤のむき身となりし涼しさよ
名月や瀬田の蜷も口開く
露の世に渡して瀬田の橋一つ
唐橋や西も東も露の中
セーターやわがなで肩も幾星霜
数へ日の箱にみかんは嬉々とあり

■一九七六年生まれ。愛知県出身、在住。古志名古屋支部長。二〇一〇年第五回船山實俳句賞受賞。二〇一二年第五十八回角川俳句賞予選通過。二〇一五年第六十一回角川俳句賞予選通過。

半歌仙「熟田津」の巻

両吟

熟田津に古へ人の臚かな

美奈子

沖へ沖へと吹きつゝの東風

陽市

囀の懐として木を植ゑて

美

土手にねころぶ休日之父

陽

月のもと仄柔らかきギターの音

美

七夕飾りどれもうるはし

陽

妖精は露の玉より生まれ出で

美

聖なる森に忍びこみたる

陽

読みかけの絵本と眠る妻も子も

陽

デートするたび降つてゐた雨

美

次々と雲を追ひこすハイウェイ

陽

たばこの煙深く吸ひこむ

美

寒月にのれん屋台の灯いくつ

陽

遠く響ける寺々の経

美

微笑みの国の日ざしの強きこと

陽

豊を猫の歩みゆくなり

美

咲き満ちて花また花の大宇宙

美

ながめ尊き春暁の富士

陽

イーブン美奈子 岡崎陽市

二〇一六年 三月六日起首 三月二〇日満尾 文韻

半歌仙「乳呑子」の巻

両吟

乳呑子の目には臙の我らかな

千方

凜とかをれる庭の白梅

陽市

里山に蚕飼女のうた響くらん

千

紺絣着て風に吹かるる

陽

有明の月に鉄火場しらみそむ

千

新聞配るひともつゆけき

陽

茶をたてる軽やかなおと秋の庵

陽

謝罪謝罪が部長のしごと

千

誕生日ともしつづけて夫を待つ

陽

時計の針のごとき二人よ

いつせいに声わきあがる競技場

オリンピックはテロの標的

冬の月だれの胸にも夢ありて

おのれは何の使徒か羅漢か

ながながとならびて砂漠ゆく駱駝

腕にひらきし蛤の柄

老いばれし身の翳むまで花の中

のどやかに舞ふ能のうつくし

千

陽

千

陽

千

陽

千

千

陽

関根千方 岡崎陽市

二〇一六年 三月三〇日起首 四月二十一日満尾 文韻

半歌仙 「麦わら帽子」の巻

両吟

麦わら帽子珊瑚の島を愛しけり

陽市

夕焼の雲に響く潮騒

美奈子

芭蕉扇大きくこの世ひとあふぎ

陽

客に振るまふ極上の菓子

美

ふりしきる光あまねし観月会

陽

蜉蝣そつと草を離るる

美

ほの白きマリア観音秋の冷え

美

バチカンは鐘うち鳴らす頃

陽

高々と投げたるブーケきらめきて

美

夫もおどろく双子誕生

陽

質屋より家宝の硯出ださんと

美

木蔭しづもる戦没者の碑

陽

この井戸に鬼棲むといふ冬の月

美

物売りたちが焚火にぎはす

陽

たまゆらの酒は老妓を傍らに

美

川くだりくる春風の舟

陽

咲きふぶく花を仰ぎて旅はるか

陽

お国ことばの里ののどけし

美

岡崎陽市 イーブン美奈子

二〇一六年 六月七日起首 七月二日満尾 文韻

入会案内

- 「古志」の年会費は一万二〇〇〇円です。
- 二十五歳未満（その年の一月一日現在）の場合、年会費は三〇〇〇円です。
- 会費の納入は郵便振替で振り込んでください。
- 振込み人欄に、氏名・併号（ふりがな）、生年・月、男女、郵便番号、住所、電話番号を明記ください。
- 郵便振替口座の番号は、次の通りです。
古志社 0010007512480
- 古志青年部に参加できるのは五十歳未満の古志会員です。青年部出身者は、五十五歳まで句会に参加することができません。
- 古志青年部ブログのURLは、
http://blog.livedoor.jp/koshi_seinenbu/です。

文章

講評

『古志青年部年間作品集第六号』を読んで

土肥あき子（「絵空」同人）

わが国の花もて飾れ夏帽子

大陸の風浴びてゐる簞

炙られて穴子は花の白さかな

イーブン美奈子

一句目、俳句は作者の名によつて評価を変えるものではないが、名が加わることで作品の輝きが増すこともある。掲句の作者は、その名でふたつの国をイメージさせ、それにより〈わが国の花〉の彩りは倍増し、両国の花は国境を超えて咲き満ちる。涼やかに風になびく夏帽子は、平和と幸福に縁取られている。二句目も〈大陸〉とは旅先ではなく、作者の暮らす土地となることで簞の生活感が高まり、異国の風の匂いや湿度が迫ってくる。三句目、元の姿が浮かんでしまい鰻も穴子も食べられないという人がいるようだ。しかし、〈花〉と見立てた作者の視線から好物であることは推して知るべし。

蕎麦湯分け合うて別れを惜しみけり

石塚直子

いつの世かわれも桜でありし頃

徹夜して帰る蛸鳴く街に

一句目、蕎麦湯は食事の仕上げ。時代のついた湯桶から注がれる蕎麦湯の淡い濁りが、別れを惜しむ二人を象徴する。二句目、桜を見る時の胸苦しい感覚は、以前桜であった頃をどこが思い出しているのだろうか。人間よりずっと長い樹木の寿命を全うしたのち、今は眺める側となつて花を見上げる。満開の桜に頭上を覆われるとき、確かにここに宿つていたのだと確信する。三句目、蛸は日の暮れ方と同様に、同じ明度の明け方にも鳴く。暮れどきのさみしさを凝縮したような鳴き声よりずっと、不安と心細さを感じられる。世界に取り残されたような徹夜明けの気分、明け方の蛸がやさしく寄り添う。

昼寝覚庭の木の根は触れ合ふや

伊藤空

葉が落ちぬ葉とその影が重なりぬ

ぶらんこや素足が星に触れる迄

一句目、昼寝覚めの頬を風が涼やかに吹き抜けるとき、庭の木の存在にあらためて思いを寄せる。

目に映る樹木とは別に、地中の様子はいかばかりと沈思するのは、寢覚めの心地ゆえだろう。木の根が語りあうように触れ合い、手を握るように絡み合っている様子がまざまざと脳裏に描かれる。二句目、今まさに落ちんとする葉をスローモーションで見届ける。己の影の上にひたりと重なり合う様子は、まるで双方が引き合ったかのようにも思われる。三句目、ぶらんこの揺れに身を任せている間は、地の者とも、空の者ともつかぬ身の上となる。存分に宙を遊んだ後の足の裏に大地が柔らかく吸い付けば、しばらくぶりの地球がまたあたたかく迎えてくれる。

鳥ばかり飛んでゆくなり雪の岬

岡崎陽市

大いなる海の小さきくぢらかな

ひと射しに天地をひらく初日の出

一句目、冬の空に突き出す岬。色彩に乏しい雪景色の中、翼あるものたちの軌跡が描かれる。それは厳しい冬のなかに存在することの唯一の証しのように、絶えることなく繰り返される。二句目、現存する最大の動物種である鯨。記録では体長三十四メートルのものまで確認されている。その鯨をもつてしても、母なる海のなかでは小さき幼な子なのである。この星に生まれた命のひとつひとつを海はきつと覚えているに違いない。三句目、新しい年の新たなる太陽。昨日と同じ日差しであっても、格別に清らかに神々しく思われる。「射」とは、弓に矢をつがえて打ち放つ様子。天と地を

切り開くように、清らかな一年の幕が切つて落とされる。一筋の光りが新たなる年の寿ぎを思わせ、健やかな一年を願う気持ちに重なる。

原爆忌海に水母の産れ続く

金澤諒和

百年の家に遺され門火焚く

雪螢メイヨノセンチトゲラレシ

一句目、八月下旬あたりに水母は幼生から成体へと変化する。原爆を落とされた日も、海中には若い水母がたくさんと浮かんでいたことだろう。生きものというにはあまりにもかそげき水母が、地上から消えた人間の魂のようにも感じられる。二句目、家は人が住まなくなるとたちまち朽ちてしまうという。家も人と共に生きている。百年の家には、百年の命が通う。この家の門をくぐって生活してきた人々が懐かしい門火へと再び集まる。三句目、「名譽の戦死」とは国のための尊い犠牲。プロパガンダとして利用されてきた言葉である。掲句の無機質なカタカナの連なりが、戦死者の無念をあらわにする。空中を青白く発光しながら浮遊する雪螢が、辛く厳しい冬の到来を告げる。

年の湯をぬいて渦巻く時空かな

関根千方

獅子舞の暴れてゆきし雪のあと

はじまりは一つの泡や寒造

一句目、風呂の栓を抜くのは最後の入浴者の役回り。湯が排水口へと吸い込まれていくように、日々もまた止めようもなく過ぎてゆく。年の暮れの充足と心許なさが〈時空〉という途方もない言葉に行き着いた。二句目、雪の上に残る獅子舞の足跡。獅子舞は激しく舞うことで厄を払い、幸せを招くと伝えられる。暴れ具合から、よほどの福を授けて去っていったのだと見て取れる。三句目、発酵の始まりはたったひとつの泡。命の始まりもまたちっぽけなもの。泡が泡を呼び、そして命を繋ぐ。

寄りかかるためにもありて冷蔵庫

高角みつこ

金粉の雲の蓋あげ節料理

成人の日のあと長し長きこと

一句目、中型の冷蔵庫で約六十キロ。ちょうど大人の男性と同じくらい。扉に凭れば、小さく唸るモーター音が波立つ心をなだめるように優しく響く。二句目、お節料理を詰める豪華な重箱は特別な日にしか使われないもの。艶やかな蓋の重さを手に移し、晴れの日が肅々と始まる。三句目、日本人の平均寿命が男女共に八十歳を超えた現代において二十歳の節目など、人生五十年時代の七五三と同程度の位置であろう。始めの〈長し〉では苦笑まじりであったものの、たたみかける〈長

きこと）には諦観すら感じられる。ゴールまで長い年月が行き先もおぼろに横たわっている。

種のある葡萄のほうがおもしろい

竹下米花

一粒の牡蠣豊饒の海である

雪踏んで踏んで千年椿まで

一句目、ものごとを面白いかどうかで捉えるのは、自分自身の尺度を楽しんでいる見方。品種改良された種なし葡萄は便利だけど面白くない。世の中の面白いものは、大概不便で人間にやさしくないのだ。二句目、牡蠣のなめらかな食感と広がる潮の香は、確かに今、海の切れ端を口に含んでいるのだと実感するもののひとつ。下五の断定が心地よい。三句目、千年椿とは幻想の産物ではなく、推定樹齢千二百年という日本最古の椿の巨木が実際に京都にあるのだと知った。ただひたすら雪を踏み続けた先にある椿はもちろん時期的に咲いているわけではないのだが、千年を経た椿は雪の中こそもつとも似つかわしい花であると思われる。

卒業の袴でとんで潦

丹野麻衣子

舟虫ものせて防人歌の島

をしみなく新藁に火や鰹焼く

一句目、明治十八年、女学生が制服として使用する袴は、宮中で使われていた袴をもとに考案された。これにより女性はきゆうくつな帯から解放され、裾の乱れを気にすることなく軽快に動き回ることが可能となった。掲句は現代の卒業式の風景ではあるが〈とんで〉の澁刺とした語感が、ほんの百年の間に、自由に勉学にいそしみ、どんな職業も手にできるようになった女性の力強い変遷に重なる。二句目、家族と別れ、故郷を遠く離れて沿岸の過酷な労働につく防人。舟虫の薄気味悪い姿も、いつしかもつとも身近な生きものとなることだろう。三句目、脂の乗った戻り鰹を、香り高い新蕈の放つ豪快な炎が包む。〈をしみなく〉には炎の勢いが見る者へのもてなしであるとともに、海の幸への感謝の心も込められる。

ふきのすぢくづとなりても光りけり

早よ帰れなすちやうどよく漬かるころ

露の中露をはじきて花ひらく

辻奈央子

一句目、人間の食用とされるとき凶らずも一部が〈屑〉となつてしまふ事実。ふんわりとひと山を築く筋のかたまりからも、露の香気はとめどなくあふれている。二句目、つやつやの茄子を店先で見かければ、具合よく漬かった実家の味を舌が思い出す。故郷が呼ぶ声は思わぬ時に思わぬところから聞こえてくる。三句目、露の玉を貫いて開く花。花が開くとは美しいばかりではなく、型を

破る力も必要なのだ。

蠮螋や発表会の初指揮者

内藤廉

秋茄子は山の神にもさらはるる

おはやうも吹つ飛んでゆくからつ風

一句目、蠮螋の立ち姿に見る指揮者然とした佇まいを見る。〈発表会〉としたことで蠮螋への親近感が示された。二句目、見事な秋茄子がたびたび紛失する事象を山の神が下りてきて持ち去っているのだと考える。まるで宮沢賢治の童話のような一場面。三句目、声もちぎれ飛ぶほどの空つ風。漫画の吹き出しが雲形であるように、声とは空に浮かぶ一瞬があるのかもしれない。吹つ飛んだ先の森の中で〈おはやう〉の声を聞く鳥や獣がいるかと思うと愉快。

火男をやり終へて飲む秋の酒

西村麒麟

草相撲代りに行つて負けにけり

生き延びてくはがた虫の雌ばかり

一句目、滑稽な火男を演じ終えた生真面目な男の素顔。ものごとの落差による魅力の強調はもは

や常套でもあるが、秋の酒によってめでたさへと昇華された。二句目、切れ字の「けり」が使われた慣用句「けりがつく」は、決着の意味を持つ。勝負にうってつけの切れ字を使った清々しいまでの負け試合。相撲の本意は力自慢であるが、そこに拍子抜けするほどの弱さを出すことで生身の人間が表出した。三句目、うすうす気づいている万象における真実をさりげなく提言する。全作を通して、作者特有の哀愁と含羞、わずかな露悪の匙加減が絶妙。

地が震へ鳥が震へ梅雨に入る

前田茉莉子

崩落を逃れし柱梅雨に入る

少し病む人コバルトのかき氷

タイトルは「熊本城」。熊本県在住の作者にとって、災害の風景はまだまだ生々しいものだろう。一句目、熊本地震は四月の芽吹き時期だった。地震は大地を揺るがし、鳥たちのねぐらも奪った。余震におびえるなか、憂鬱な梅雨が容赦なくやってくる。二句目にも震災後の長雨を憂う気持ちが入る。三句目、コバルトとは空色。青色は食品に向かないといわれてきたが、かき氷のシロップラッキングには王道のいちごに続き、二位がブルーハワイ。見た目の鮮やかさに心が解放される効果があるようだ。

対岸に回りて浮巢なほ遠く

三玉一郎

たましひのひとかたまりや蚊帳の中

よく枯れて一本の木となりにけり

一句目、水上に浮かぶ水鳥の浮き巢は、陸上の外敵から身を守るため。陸のどこからも遠く、辿りつくことが困難でなければ意味がないことに気づく。作者にとつての徒労は、浮巢の主への賞賛とエールでもある。二句目、数人が寄り添って眠る様子をへたましひとしたことで、境界線のないう一体感が生まれた。ひとしきり遊んだ子どもたちが組み合つたまま眠っているのか、母と子が頬を寄せているのか、蚊帳が緑色の生命体のようにも見えてくる。三句目、葉が落ちきつたところで見えてくる木の骨格。一本であることを主張するのはよく茂つた夏の木ではなく、葉を落とした冬の木なのだという発見。

どの坂の上にも雲や夏来る

森篤史

ああああと相槌打つてゐる大暑

生きるため大き屁をして放屁虫

一句目、偶然が必然を伴っているように、坂と雲の完全なる調和は、雲を慕うあまり大地が伸び

上がったようにも見えてくる。恋する視線は見上げる姿勢がよく似合う。二句目、相槌とは相手への同意や同感によって示されるもの。しかし、このやる気の感じられない相槌は、話の内容はともかく、ひとまず調子を合わせているだけ。逃げも隠れもできない厳しい暑さが追い打ちをかけるようにやる気を削いでいく。三句目、放屁虫が悪臭を放つのは自身に危害が加えられるとき。あくまで防御の効用である。玉虫など美しい名を持つ虫がいる一方で、不本意な名を持つものの哀れに思い至る。

ペーロンや銅鑼なき人は手を叩き

吉富緑

烏瓜背より夕日の迫りけり

熊穴に入りて寂しき金太郎

一句目、ペーロンは江戸時代、荒天で難破した船の乗り手を悼み、また海神の怒りを鎮めるために行われたもの。鮮やかに彩られた船が海を埋め、銅鑼や太鼓が鳴り響くなかで、手を叩き、声の限りに声援を送る。身体もまたひとつの楽器であることをあらためて感じる。二句目、眼前に下がる烏瓜を見つめながら、茜色に包まれる。それはまるで、全身がみるみる烏瓜に染まっていくようにも感じられ、この不思議な果実の存在を強調する。三句目、おなじみの金太郎の歌は「熊にまたがりお馬の稽古」。山暮しのなかで熊が冬籠りしている間、金太郎はなにをしているのだろうか。

心配になつて二番を確認すると「猷集めて相撲の稽古」とあつた。冬眠しない友達もいるようではつとした。

動きゐる春の曲線磯づたい

渡辺竜樹

貝の身の抱く真珠も明け易し

露の世に渡して瀬田の橋一つ

一句目、波打ち際の曲線の意図的な動きは、さながら海が陸へと身を放り出しているかのように思わせる。二句目、身に真珠を抱く。それだけで美の化身となつたような貝である。「明易し」とは夜が短いことを嘆く心残りを表すことを思うと、この句にも言い知れぬ艶が潜む。三句目、瀬田の唐橋は東海道から京にのぼるために必ず通らなければならぬ橋。露の世とははかないこの世のこと。露の世に生きる人間がどのような思いを抱きながら、幾度渡り続けてきたかを思う。タイトルが「エロス」である効果は全句を通して大いに有効であつたと思う。

■一九六三年静岡生れ。俳句結社「鹿火屋」を経て、同人誌「絵空」を創刊。句集『鯨が海を選んだ日』『夜のぶらんこ』エッセイ集『あちこち草紙』『遊びの記憶』

報告

青年部合宿句会報告（二〇一七年一月十五日）

石塚直子

一月十五日（日）に、向島百花園にて、古志青年

部句会を行った。参加者は、大谷弘至主宰・丹野麻

衣子さん・森篤史さん、石塚の四名。

天気は快晴。園内からみるスカイツリーが壮観。

句会日和であった。

大谷弘至主宰入選句

絶対に来る人を待ち梅の花

福祿寿様に捧げん寒牡丹

厳寒の空に一羽も見当たらず

霜柱立つや赤き実なほ赤く

冬の日にかがやくマスクの人にあふ

青空へあつまつてゆく雪吊よ

石のあるところ好みて冬萌ゆる

篤史

麻衣子

直子

麻衣子

麻衣子

篤史

直子

第一句座、吟行句、五句出句五句選

大谷弘至主宰特選句

声にならぬ言葉溜まつてゆくマスク 篤史

霜柱声となるまで踏まれるな 篤史

見つけても見つけても梅探しゆく 篤史

第二句座からはゲストに土肥あき子さんをお招き

しての句座である。土肥さんは第二句座前の昼食か

ら合流。顔合わせ・自己紹介を済ませた後は、五人でわいわいと、おでんと茶飯の昼食をとった。

昼食後、第二句座の出句のため、各々再び吟行へ。

吟行後は全員で「言問団子」と「砂糖漬野菜菓子」

(注：園内で売られている。江戸時代より続く伝統菓子)でひと息つき、出句の準備をしていると、イーブン美奈子さんが現れた。

イーブンさんはタイ在住だが、今回歌留多の大会に出場するため(イーブンさんは競技歌留多もなさっている)来日されたとのこと。この日午前中に試合をされ、その足で句会場へ来られたのだった。

第二句座は、土肥あき子さん・大谷主宰・丹野さん・森さん・イーブン美奈子さん・石塚の六名となった。

第二句座 吟行句、十句出句七句選

土肥あき子さん特選句

葉も虫もまとめて水面氷りけり

篤史

駆けつけに団子召されよ梅の花

弘至

福祿寿様もほしがる髭袋

麻衣子

雪吊をはみ出してゆく男松

篤史

鳥のごと飛び込んできて初句会

美奈子

土肥あき子さん入選句

霜柱踏むや心の折れる音

弘至

寒晴や魂はみなしろがねに

麻衣子

また一人湯気立ての間に入り来て

麻衣子

何もかも中途半端や梅の花

美奈子

見下ろさず見上げずに見る梅の花

篤史

雪よりもはんぺん白し春を待つ

弘至

蓮根も大根もみな砂糖漬

麻衣子

微笑まれ微笑みかへす冬の園

篤史

鶴ひとつ尾翼にのせて今朝の春

美奈子

飾られて宮中へゆく七種よ

麻衣子

大谷弘至主宰特選句

啄木鳥のきらきらこぼす木屑かな

篤史

寒の水己れの揺れを映しけり

あき子

こぼすものなくても揺るる枯萩よ

篤史

空を来ていざ芭蕉の間みやこどり

美奈子

蓮根も大根もみな砂糖漬

麻衣子

大谷弘至主宰入選句

葉も虫もまとめて水面氷りけり

篤史

冬菜積む舟や大川すべりゆく

麻衣子

寒雀思ひ思ひの日を拾ふ

あき子

甘酒によごさぬやうに髭袋

麻衣子

かじかむ手もて茶をいれるしづけさよ

美奈子

日だまりや百花咲くとは百花枯る

あき子

鳥のごと飛び込んできて初句会

美奈子

森さんの「葉も虫もまとめて水面氷りけり」は冬の様子を詠んだ高得点句。「駆けつけに団子召されよ梅の花」「鳥のごと飛び込んできて初句会」「空を来ていざ芭蕉の間みやこどり」は、句会にいらしたイーブンさん（へ）の挨拶句。

丹野さんの「甘酒によごさぬやうに髭袋」の、「髭袋」というのは聞き慣れない・見慣れない季語だと思ふ。出句前に、改造社の『俳諧歳時記』を石塚が使っているのに気がつかれた土肥さんが「この歳時記は読むとおもしろいことが書かれている。たとえば…」と言つて紹介されたのがこの季語「髭袋」だつた。その名の通り、髭を入れるための袋で、同書には挿絵が載っているのだが、これがまたおもしろい。

丹野さんはそれを受け、即座に詠まれたのだ。お見事である。

句会后、土肥さんには、参加者からの質問にお答えいただいた。

土肥さんは、御自分が句作される際に心がけていることや俳句を始められたきっかけ、普段俳句について考えていることなどを交えて、丁寧に答えてくだされた。土肥さんのお話はどれも今後の自分たちの句作にいきる話であったことと思う。

以上、合宿句会は盛会のうちに終わった。

今回の句座の出会いを大切に、引き続き、実りある俳句人生を歩みたいと思う。

※同日の句会については、「古志青年部ブログ」（二〇一七年一月二十二日掲載分）でも報告した。当報告は、ブログへ掲載したものを改編したものである。

二〇一六年 古志青年部年間活動記録

- 二〇一六年三月 第五回（春）ネット句会
 - 二〇一六年七月 第六回（夏）ネット句会
 - 二〇一六年十月 第七回（秋）ネット句会
 - 二〇一七年一月 第八回（冬）ネット句会
- ※ネット句会はいずれも席題。三句出句三句選。
- 一月十五日（日）合宿句会
 - 「古志青年部ブログ」連載
 - ※「タイ便り」イープン美奈子さん
 - ※「大阪便り」高角みつこさん（注：現在休載中）
 - ※「熊本便り」前田茉莉子さん
 - ※子規 × 漱石生誕一五〇年企画
 - 「子規の一句」岡崎陽子さん
 - 「漱石の一句」関根千方さん

編集 石塚直子
デザイン 関根千方

古志青年部年間作品集 第6号

2017年6月31日 発行

発行者 古志青年部
発行所 古志社 (<http://www.koshisha.com/>)
印刷所 しまや出版

©2017 KOSHI SEINENBU

お問い合わせ：石塚直子（古志青年部）
〒180-0022 東京都武蔵野市境 2-24-3 パレーシャル武蔵野 B103